

『メランコリア』 原題 Melancholia 2011



©2011 Zentropa Entertainments ApS2

映画批評

『メランコリア』

～デジタルとアナログを融合したシュールリアリズム絵画のような映画

塚田三千代（映画英語アナリスト）

メランコリアは巨大な惑星の名前。夜空にしだいに大きく映し出され、眼前に迫ってくる。その美しく荘厳な映像の背景に、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」が BGM として流れる。地球に向かって近づいてくるのを、ジャスティンが知ったとき、胸騒ぎがして精神が不安定になる。だが、惑星メランコリアは冷たく平然として地球に向かって、「私はここにいる、お前はどこにいるのか」と問いかけているかに見える。

本作品は、映像と音楽で言葉を越えるものを象徴的に表現している。動と静／デジタルとアナログを融合したシュールリアリズム絵画のような映画である。映画だからこそできる超現実的な映像シーケンスを、プロローグからエンディングにいたるまで各所で

みせてくれる。ちなみにプロローグの映像は8分かかるが、それでもくりかえし観たくなる8分間である。

映画は、序章・第1章ジャスティン・第2章クレアの3部構成である。クレアとジャスティン姉妹やジョンとマイケルの対照的な人物たちが結婚式という場所と時空で、惑星メランコリアの地球近接を転換点として、彼らの心中が陽/躁から陰/鬱へと変転していく。——そこに見えてくる真実は何か？ 絶体絶命のターニング・ポイントに立たされた時の選択を暗喩している。

「2012年に人類が滅亡して世界が終わる。」というマヤ暦を根拠とするような結末は、鑑賞者に誤解と動揺を招きかねない。しかし不慮の事態や自然災害も起こりかねない今の社会情勢において、ラース・フォン・トリアー監督はそれを映画の創作世界を通して提言しておきたいのであろう。だが、これは映画の鑑賞者の感じ方しだいである。

カンヌ国際映画祭でキルスティン・ダンストが女優賞を受賞した。

標準的な英語の他に、仏語や独語も一部出現。必見、お薦めできる映画である。
(2012/01/06)

【映画情報】

- | 2011年／デンマーク、スウェーデン、フランス、ドイツ、イタリア合作映画
- | 原題：MELANCHOLIA
- | 135分／カラー／シネマスコープ／ドルビーデジタル
- | 字幕翻訳：松浦美奈
- | 配給：ブロードメディア・スタジオ
- | ©2011 Zentropa Entertainments ApS2

2012年2月21日(土)、TOHO シネマズ 渋谷ほか全国ロードショー

- | 監督・脚本：ラース・フォン・トリアー
- | 出演：キルスティン・ダンスト(ジャスティン役)／
シャルロット・ゲンズブール(クレア役)／
アレクサンダー・スカースガード(マイケル役)／
キーファー・サザーランド(ジョン役)

【DVD 情報】

- 形式: Color, Dolby, Widescreen
- 言語: 英語, 日本語
- 字幕: 日本語
- リージョンコード: リージョン 2 (この DVD は、他の国では再生できない可能性があります。詳細についてはこちらをご覧ください [DVD の仕様。](#))
- 画面サイズ: 1.78:1
- ディスク枚数: 1
- 販売元: ジェネオン・ユニバーサル
- DVD 発売日: 2012/08/03





「メランコリア」という語は古代医学の学説・四体液説に由来する。人体を構成する血液・粘液・黄胆汁・黒胆汁の4つの体液のバランスが崩れて病気になるとするこの説では、人間の性格(気質)もこの4体液のバランスから決まるとしている。4体液のうち、「黒胆汁」が過剰な人は「憂鬱質」(メランコリア)という気質になるとされたため、「黒い」を意味する古代ギリシア語の「μέλας」(melas)と「胆汁」を意味する「χολή」(kholé)を合成した「メランコリア」(憂鬱質)という語が生まれた。(出典 *wikipedia*)